



「海の自然と災害」

宇野木早苗 著

成山堂書店, 2012年6月
370頁, 5000円(本体価格)
ISBN 978-4-425-53131-8

評者は、この本の著者のこれまで出版されたテキストの読者でもある。著者は気象庁・気象研究所と東海大学で沿岸にまつわる種々の研究を長年行ってきた。著者の今回のテキストは、著者自身が、「思えば、米寿を迎えた筆者がこれまで海と関わった人生の、前半期はおもに海洋災害に関するものであり、後半期はおもに沿岸の海洋環境に関するものでありました。本書はこの前半期の締めくくりに意味を含めて著しました。」と述べているように、著者の研究活動前半の集大成である。

現在、著者は静岡市に在住されており、東海大学海洋学部の図書室に通われて、資料収集と執筆活動を行われているようである。2012年9月の東海大学で開催された海洋学会でお会いした折には元気なお姿を拝見した。このテキストを読んで、米寿を迎えてなお衰えない著者の博覧強記には、正直、頭が下がる思いである。

本書の目次は下記の通りである。

- 第1章 海洋波動の特性
- 第2章 津波
- 第3章 高潮
- 第4章 波浪
- 第5章 気象擾乱による海難
- 第6章 海難にともなう漂流
- 第7章 海岸の侵食と構造物の被災
- 第8章 河口域の自然と災害
- 第9章 その他の海洋災害
- 第10章 社会と海洋災害

目次からわかるように、海洋災害に関して全てのテーマが網羅されている。2011年3月11日の東北地方太平洋沖地震による大規模な津波についてももちろん述べてある。本書のテーマの記述に際しては、海洋災害に関係する海洋と気象にまつわる自然現象の基本的な解説を行い、海洋災害の事例を新旧各種膨大な資料

に即して詳細に説明し、それらの災害に対する対策を簡条書きに記述している。

自然現象の解説には、微分方程式は一つも出てこず、最小限の簡略な数式と、その後の物理的な解釈を与えてくれており読みやすい。その解説には非常に専門的なものまで含んでおり、例えば、ラディエーションストレスやフリーク波まで物理的な解説・説明がある。

海洋災害の事例は、単にその事例を記述するのみならず、事例の背後にある現象の物理的な解説も行っている。これは、その災害が起こった原因となる自然現象を、多くの人が少しでも理解することにより、災害の危険から少しでも免れる知恵を得てもらい「減災」に結びつけたいという、社会と直接関わりながら長年活動してきた海洋学者としての矜持が見て取れる。図表は概して古いものが多いのは歴史的な事例を網羅しているため致し方ないが、基本的で有益な情報は全て含んでいる。

災害に対する対策は、単に自然現象に関してだけでなく社会経済的な観点や、一般の人の災害に対する物の考え方に関しても、種々のアドバイスがまとめられている。そのため、学生・研究者のみならず一般の読者、防災業務に係わる方々が、各々の海に関わる防災意識を高める上で、非常に役立つと思われる。

気象学会会員へは気象が原因での災害は陸上だけでなく沿岸や海上でも頻繁に起こっており、その原因として気象現象（と海との相互作用）が重要な役割を担っていることを知ってほしい。

内容に関しては、評者が現在関わっている人工衛星を用いた観測、たとえば衛星海面高度計による海流や津波観測、海洋大循環モデルとデータ同化手法による沿岸現象の予測等、いくつかのごく最近の話題に触れられていないのは残念であるが、著者も前書きで述べているように本書は専門書ではなく一般解説書であり、より広い一般の読者を対象としたものである以上致し方ないと思われる。

本書が、学生はもちろんのこと、気象学会員の方々や防災業務に関わる全ての方々様々な立場から読まれて、自然との調和がとれた共存を図り、「減災」に生かされることを強く期待する。

(気象研究所 蒲地政文)